

INFORMATION 農学部取り組み

農学部初のオンライン公開セミナーを実施しました。



6月20日(土)に予定されていた第58回農学部公開セミナーはコロナ禍のため中止となりましたが、そのまま中止するには惜しいテーマや講師であったためあらためて同じ日程で予定どおりの講師による、Zoomウェビナーを利用した「第1回農学部オンライン公開セミナー」として企画・開催されました。

初めての形態の企画でしたが、蓋を開けてみれば、Zoomウェビナーで500を超える参加件数があり、参加可能件数を超えた場合に備えて配信されたYouTube Liveには、100を超える視聴件数がありました。

農学部はどのようにコロナ禍に対応してきたか

新型コロナウイルスの感染拡大の深刻なニュースが中国で発表されていた頃、中国からの留学生や中国との共同研究者が多い農学部では、その動向に注目していましたが、これが日本をはじめ、世界中に、これほど急速に波及するとは考えていませんで



した。ダイヤモンド・プリンセス号におけるCOVID-19の症例や国内での感染拡大を受けて、東京大学では、3月の学位記授与式や卒業式を大きく縮小し、農学部でも対面での学位記の伝達を取りやめました。この段階でも、4月に入って、大学院生の入学式や3年生の進学式は、対面で行えるのではないかと期待していました。4月3日、東京大学の新型コロナウイルス対策タスクフォースから、活動制限指針が発表され(表1)、当初はレベル1でしたが、すぐにレベル2、レベル3まで引き上げられました。このため、農学部では、大学院生や進学生のガイダンス、授業や演習、会議など、すべてをオンラインで行うという新しいスタイルに直ちに突入しました。学事暦は変更しないという大学の方針に従い、私達は、教員のオンライン授業のためのトレーニング、そして、これを受けるための学生たちの通信環境の整備とトレーニングに没頭しました。同時に、研究活動も、どうしても必要な生物材料の維持のみに限って行い、事務組織もテレワークとなり、6月15日にレベル1に基準が引き下げられるまで、この状態が続きました。

表1 新型コロナウイルス感染拡大防止のための東京大学の活動制限指針

レベル	総合	研究活動	授業 (講義・演習・実習)	学生の課外活動	学内会議	門の閉鎖
0	通常					
0.5	一部制限	感染拡大に最大限の配慮をして、研究活動を行うことができます	感染拡大に最大限の配慮をして、対面授業、演習・実習を制限しつつ、オンライン講義を中心に授業を行います。	感染拡大に最大限の配慮をして、一部の課外活動を許可します。	感染拡大に最大限の配慮をして、対面会議を行います。が、オンライン参加を推奨します。	原則、守衛のいる門のみ開き、入構には身分証の提示が必要です。
1	制限-小	研究活動は続行できますが、感染拡大に最大限の配慮をしつつ、学生・研究員・研究スタッフ(研究室関係者)は現場での滞在時間を減らし、可能な場合は自宅で作業することを検討する必要があります。	オンライン講義のみ	全面禁止	対面会議は必要最小限とし、移せるものからオンライン会議に移行します。	原則、守衛のいる門のみ開き、入構には身分証の提示が必要です。
2	制限-中	現在進行中の実験・研究を継続するために必要最小限の研究室関係者のみの立ち入りが許可されます。立ち入る研究室関係者は現場での滞在時間を減らすとともに、それ以外の研究室関係者は自宅での作業となります。	オンライン講義のみ	全面禁止	オンライン会議のみ	原則、守衛のいる門のみ開き、入構には身分証の提示が必要です。
3	制限-大	以下の研究スタッフ(事情によっては大学院生・研究員も可)の研究室への立ち入りが許可されます。 1) 中止することにより大きな研究の損失を被ることになる、長期間にわたって継続している実験を遂行中の研究スタッフ 2) 進行中の実験を終了あるいは中断する業務に関わる研究スタッフ 3) 生物の世話、液体窒素の補充、冷凍庫修理など研究材料の維持あるいはサーバーの維持のために一時的に入室する研究スタッフ	オンライン講義のみ	全面禁止	オンライン会議のみ	守衛のいる門のみ開き、入構には身分証の提示が必要です。
4	構内活動の原則停止	大学機能の最低限の維持のために、専攻長など組織代表者の許可の下で、生物の世話、液体窒素の補充、冷凍庫修理、サーバー保持などを目的に、一時的に入室する研究スタッフのみの立ち入りが可能です。	オンライン講義のみ	全面禁止	オンライン会議のみ	緊急性の高い用務のみ入構を許可します。守衛のいる門のみ開き、入構には身分証の提示と入構記録が必要です。

*なお、医療関係者およびコロナウイルス研究従事者はこの活動制限の適用範囲外
*この活動制限指針は、今後の状況に応じ、随時見直しを行う場合があります。



INFORMATION 農学部を取り組み

レベルⅠへの引き下げを受けて、各研究室では、チェックリストにしたがって教育・研究活動の再開準備を進め、研究室での出入りのログを残し、新しい生活様式の例(表2)にしたがって、ゆるゆると活動を始めています。こんな中、第一回農学部オンライン公開セミナーを開催しましたが、700名以上の方々のご参加をいただき、大変感謝しています。今後、大学は、少なくとも7月10日まではレベルⅠを維持する予定で、この時点で、研究に携わっている学生の入構時間率を30%、事務組織の滞在時間率を60%まで戻すことを目標としており、現在、出張、訪問者の受け入れ、キャンパス内での学会開催などの対応の基準を作成しているところです。しかし、活動規制基準がレベル0になるためには、ワクチンができる、集団免疫が獲得されるなどの条件が必要となるので、農学部としては、ここまで培ってきた経験をもとに、新しい研究・教育システムの構築、ウィズコロナ・アフターコロナ時代の働き方改革の推進に努力する所存です。

東京大学農学部スタッフ会議

追記：本稿脱稿後、7月13日より活動制限レベルは0.5となりました。学内者の入構は、健康状態の報告内容に応じて承認される仕組みとなり、SARS-CoV-2についての科学的情報を皆で共有し、感染防止策を強化しながら、教育・研究活動を進めています。(8月26日現在)

表2 新しい生活様式の例

(1) 一人ひとりの基本的感染対策

感染防止の3つの基本：①身体的距離の確保、②マスクの着用、③手洗い

- ☐ 人との間隔は、**できるだけ2m(最低1m)** 空ける。
- ☐ 会話をする際は、可能な限り**真正面を避ける**。
- ☐ 外出時や屋内でも会話をするとき、**人との間隔が十分とれない場合は、症状がなくてもマスクを着用する**。ただし、**夏場は、熱中症に十分注意する**。
- ☐ 家に帰ったらまず**手や顔を洗う**。
- ☐ 人混みの多い場所に行った後は、できるだけすぐに着替える、シャワーを浴びる。
- ☐ **手洗いは30秒程度**かけて**水と石けんで丁寧に洗う**(手指消毒薬の使用も可)。

※ 高齢者や持病のあるような重症化リスクの高い人と会う際には、体調管理をより厳重にする。

移動に関する感染対策

- ☐ 感染が流行している地域からの移動、感染が流行している地域への移動は控える。
- ☐ 発症したときのため、誰とどこで会ったかをメモにする。接触確認アプリの活用も。
- ☐ 地域の感染状況に注意する。

(2) 日常生活を営む上での基本的生活様式

- ☐ まめに**手洗い・手指消毒** ☐ 咳エチケットの徹底
- ☐ こまめに換気(エアコン併用で室温を28℃以下に) ☐ 身体的距離の確保
- ☐ 「**3密**」の回避(**密集、密接、密閉**)
- ☐ 一人ひとりの健康状態に応じた運動や食事、禁煙等、適切な生活習慣の理解・実行
- ☐ 毎朝の体温測定、健康チェック。発熱又は風邪の症状がある場合はムリせず自宅で療養



(3) 日常生活の各場面別の生活様式

買い物

- ☐ 通販も利用
- ☐ 1人または少人数ですいた時間に
- ☐ 電子決済の利用
- ☐ 計画をたてて素早く済ます
- ☐ サンプルなど展示品への接触は控えめに
- ☐ レジに並ぶときは、前後にスペース

娯楽、スポーツ等

- ☐ 公園はすいた時間、場所を選ぶ
- ☐ 筋トレやヨガは、十分に人との間隔をもしくは自宅で動画を活用
- ☐ ジョギングは少人数で
- ☐ すれ違うときは距離をとるマナー
- ☐ 予約制を利用してゆったりと
- ☐ 狭い部屋での長居は無用
- ☐ 歌や応援は、十分な距離からオンライン

公共交通機関の利用

- ☐ 会話は控えめに
- ☐ 混んでいる時間帯は避けて
- ☐ 徒歩や自転車利用も併用する

食事

- ☐ 持ち帰りや出前、デリバリーも
- ☐ 屋外空間で気持ちよく
- ☐ 大皿は避けて、料理は個々に
- ☐ 対面ではなく横並びで座ろう
- ☐ 料理に集中、おしゃべりは控えめに
- ☐ お酌、グラスやお猪口の回し飲みは避けて

イベント等への参加

- ☐ 接触確認アプリの活用を
- ☐ 発熱や風邪の症状がある場合は参加しない

(4) 働き方の新しいスタイル

- ☐ テレワークやローテーション勤務 ☐ 時差通勤でゆったりと ☐ オフィスはひろびろと
- ☐ 会議はオンライン ☐ 対面での打合せは換気とマスク

※ 業種ごとの感染拡大予防ガイドラインは、関係団体が別途作成

農学部1号館耐震改修



農学部1号館地下1階の森林科学専攻学生実験室に置かれていた屋久杉巨樹の円板標本が、1号館の耐震改修に伴い、農学資料館に移設展示されました。最大直径は2mを超える巨大な円板です。

この円板標本の樹齢は、約1600年と推定されます。

現在コロナ禍で農学資料館は閉館中ですが、開館された際には是非ご覧ください。



令和2年度からの1号館耐震改修工事による研究室・講義室の一時的な引っ越しのために1号館・2号館の間にプレハブ棟が建てられました。

この8月には研究室の引っ越しも行われています。

今年度を第1期、来年度を第2期として工事が行われ、来年度中に工事完了の予定です。



弥生
71
Fall 2020



東京大学大学院
農学生命科学研究科・農学部
Web サイト
www.a.u-tokyo.ac.jp

編集後記

SARS-CoV-2(新型コロナウイルス)は2019年11月に初めて発生が確認されてから、世界的に感染が拡大し、このパンデミックは、医療現場のみならず、あらゆる社会生活に大きな影響を与えています。本号では「闘う」というタイトルで、私達が、今後、新型コロナウイルスとどのように付き合っていくか良いかを考える特集を組みました。「Yayoi Highlight」では、久和先生にコロナウイルスについて概説いただき、「農学最前線」では、八村先生、齋藤先生に、それぞれ食と経済の観点から、ご自身の研究をもとにコロナ禍で何をすべきかを書いていただきました。そして「INFORMATION」では、東京大学農学部がどのような対応を

しているかについてご紹介させていただきました。しかし、そんな難しい時代でも農学部は前を向いて進んでいくという決意を、「IN THE SOCIETY」の出雲さま、「ON THE CAMPUS」の生産・環境生物学専攻の皆さん、そして「Epiphanies その瞬間」の金子先生のお話に感じていただければと思います。パンデミックは、まさに人類のグローバルな生活活動が原因で起こっています。人類の衣食住・健康を基本から多方面にわたって支えている学問領域「農学」は、これから何をすべきなのか、真剣に考え、解決策を実践していくことは、私達のミッションです。

広報室長 高橋伸一郎